(久美子) 麻美 来週末どうするの おばあちゃん家｡

(麻美) どうしようかな｡

(久美子) しばらく行ってないでしょ たまには 顔見せてあげな？

(麻美) 分かった｡

>> 一緒におじいちゃんのお墓参りに 行くから｡

(麻美) うんうん｡

遥 どうすんの？

(遥) 行くよ 私 運転だから｡

(麻美) あっ そっか｡

(遥) ごちそうさま｡

(麻美) お父さん 行くの？

(寛) 仕事が入っちゃってんだよ｡

(麻美) あぁ そうなんだね｡ >> 麻美 もう52分だけど大丈夫？

間に合うの？

(麻美) えっ ヤバい 52分｡

ごめん 遥 乗せてって｡ >> いいけど 私 もう出るよ｡

(麻美) ダッシュで食べる あと何分？

(遥) あと10分後ぐらい？

(麻美) ＯＫ！

寿命かな？

(麻美) ⟨思えば この日が 人生最後の日だった⟩

⟨１周目の⟩

♪～

(麻美) あれって さくら保育園？ >> そうだね｡

(麻美) うちらの時 あのカートなかったよね？

あぁ… なかったね｡

(麻美) いいなぁ 運んでもらえて｡

今 運んでもらってるからね｡

(麻美) あ… そっか｡

あれ？ 公園の電話ボックス なくなってる｡

(麻美) ん？ あんなとこに 電話ボックスなんてあったっけ？

あったよ～ 使ってんの見たことないけど｡

(麻美) まぁ でも 今 使わないもんね｡

全然関係ないけど お姉ちゃん 結婚しないの？

(麻美) 結婚？ あ～ フフフ…｡

>> まぁ 今 特に不自由もないしね｡

(麻美) そうなんだよね｡

家あるしさ お金も自由に使えるじゃん｡

確かに｡

お父さんみたいに へそくりしなくていいもんね｡

(麻美) え？ お父さん へそくりしてんの？

何か 靴の中に コツコツ貯めてるらしいよ｡

(麻美) 知らなかった 今度 見てみよう｡

結婚当初からしてるって お母さん 言ってた｡

(麻美) バレてんじゃん｡ >> ハハハ｡

(麻美) ありがとう｡ >> は～い 帰りは？

(麻美) 今日ね みーぽんたちと ごはん食べるから多分 みーぽんに 乗せてってもらうと思う｡

>> は～い｡

(麻美) じゃあね！

おはようございます｡

(麻美) おはようございます｡

(職員たち) おはよう｡

(麻美) ⟨地方公務員には制服がないので 服装は自由⟩

⟨男性職員は ネクタイの人が多いけど女性職員は 割とカジュアル⟩

⟨窓口じゃない日は Ｔシャツやパーカでも可⟩

⟨とはいえ 国保年金課で｢地獄に落ちろ｣は ダメな気がする⟩

⟨地方公務員は 福利厚生が充実していたり社会的信用性が高いことなど さまざまなメリットがあるが決して楽な仕事ではない⟩

⟨特に大変なのが窓口業務⟩

(市民) だから 何とかならないの？

(麻美) 規則なのでね 支払っていただくしか｡

チッ 何だよ 税金泥棒がよ｡

もういいよ 上の人 呼んでよ｡

(麻美) 少々お待ちください｡

⟨毎日 とにかく怒られる⟩

谷口課長 すみません あちら よろしいですか？

(谷口) あ はいはい｡

(麻美) ⟨部署によっては 胸ぐらをつかまれてシャツを 破られることもあるのでワイシャツの替えを 常備しているらしい⟩

⟨窓口といえば 昔から地味に 気になっていることがある⟩

⟨それは 来た人を迎える時の言葉⟩

⟨市役所は お店ではないので｢いらっしゃいませ｣とは 言えない⟩

⟨とはいえ 他に ちょうどいい言葉もないので…⟩

96番の方？ >> はい｡

(麻美) ⟨毎回 ちょっと変な間が空く⟩

⟨お昼は大体 同期３人で 中華かパスタ たまに蕎麦⟩

もうさ ｢いらっしゃいませ｣で 統一してほしいよね｡

(春菜) 別に間違ってはないもんね｡

(美樹) 私 ｢こんにちは｣って 言ってるよ｡

(麻美) 私も前までは ｢こんにちは｣って 言ってたけどさ一回キレられたんだよね なれなれしいっつって｡

>> 普通に挨拶でしょ｡

(麻美) でしょ？ 意味分かんなくない？

それは ひどいね｡

そういえば 保育士さんって 子供迎えに来た親に｢おかえりなさい｣って 言うんだって｡

(麻美) ふ～ん｡

>> 仕事帰りの人が多いからだ｡

(美樹) そうそう で 朝は｢いってらっしゃい｣って 送り出すんだって｡

そのまんま仕事に行くからだ｡

(麻美) じゃあ うちらも ｢おかえりなさい｣にする？

>> 絶対キレられる｡

(麻美) 絶対キレられる｡

>> あとさ 窓口の締めの挨拶って ムズくない？

(麻美) 分かるよ｡

だって ｢ありがとうございました｣ じゃないもんね｡ >> そう｡

｢お疲れさまでした｣って言うのも 変だしね｡

しっくりくるのないよね｡ >> うん｡

(麻美) じゃあ ｢いってらっしゃい｣にする？

>> 絶対キレられる｡

(麻美) 絶対キレられる｡

⟨こうやって私たちは 午前中に たまったストレスを吐き出し午後から また新たなストレスをためる⟩

⟨この仕事で めんどくさいことといえば何をするにも いちいち決裁を 取らなければいけないこと⟩

⟨例えば シャーペン１本買うのにも自分の課の係長と課長そして 経理係の係長と課長の 決裁を取ってから業者に発注しなくてはいけない⟩

⟨だから シャーペン１本買うのに １か月近くかかったりする⟩

(美奈子) あれ どうにかしてほしいですよね｡

(麻美) ホント無駄だよね｡ >> 無駄ですね｡

何か 友達ん家で｢トイレ 借りていい？｣って聞くのに似たものがありますよね｡

(麻美) トイレ？

あれも別に ｢ダメ｣って 言う人なんかいないけどなぜか許可を 取っちゃうじゃないですか｡

(麻美) トイレは すぐに借りられるけどね｡

そうですね｡

(麻美) ⟨ちなみに彼女は今 他人の湯飲み を無許可で使っている⟩

(麻美) ⟨幼なじみのなっちと みーぽん⟩

⟨２人とは 月２くらいのペースで ごはんに行く⟩

(夏希) みーぽん ちょっと過ぎちゃったけどお誕生日おめでとう！

(麻美) おめでとう！

(夏希) はい これ うちら２人から｡

(美穂) やった～ ありがとう 開けていい？

(夏希) うん 開けて 開けて｡

(美穂) 何だろう 何だろう｡

あっ！ これ欲しかったやつ！

(麻美) やった～｡

(夏希) よかった～｡

(美穂) これ結構したんじゃないの？

(夏希) いや そんなでもないよね｡

(麻美) まぁ ２人からだしね｡

(美穂) え～ ありがとう めっちゃうれしい｡

使わせていただきます｡

(夏希) おめでとう｡

(麻美) みーぽん｡

(美穂) ん？

(麻美) 今 一瞬あっち見た？

(美穂) あっち？

(麻美) うん｡

もしかしてさ 店員さんが何か 持って来るかなって思ったよね？

(美穂) ん？ 何を？

(麻美) 流れ的にさ 花火が バチバチ～ってなってるやつ持って来るって思った？

(夏希) えっ そうなの？

(美穂) ちょっとだけ思った｡

(麻美) 普通 流れ的にそうだもんね｡

(夏希) ごめんごめん 今回ないのよ｡

(美穂) そうなんだ 全然全然｡

(麻美) みーぽん ああいうの嫌いじゃん｡

(夏希) 毎回 みーぽん恥ずかしがるからね 今年はなしにしたの｡

(美穂) そうなんだ ありがとね｡

(夏希) えっ… もしかして やってほしかった？

(美穂) いやいや 全然 そういうことじゃ ない｡

だけど そうそう…｡

ね｡

(麻美) えっ 何？

(美穂) いやさ あの 前にさ あーちんの 誕生日会 ここでやったじゃん｡

(夏希) やったね｡

(美穂) その時はさバチバチ～のやつあったじゃん｡

(麻美) だってほら 私はやってほしいﾀｲﾌﾟの人間だからね｡

(美穂) それは全然いいんだけど｡

今日さ あの時と同じ店員さんだから何か 同じメンバーなのに あの子だけ バチバチ～のやつやってもらえないんだとか 思われてないかなと思って｡

(麻美) あ～｡

(夏希) あ～｡

気にし過ぎじゃない？

(麻美) 多分 覚えてないと思うよ｡

(美穂) そうだよね うん｡

(麻美) 一応 店員さんに伝えとこっか？

(美穂) えっ 何を？

(麻美) 何か 今回 そのバチバチ～のやつ やらないのはこの子が苦手だからであって そういうのが｡

決して この子の扱いが 低いとかじゃないですよって｡

(美穂) やめて… 余計 恥ずかしいから｡

(麻美) ホント？ 大丈夫？

(美穂) 変な感じになっちゃうから｡

そういえばさ 昨日 机 整理してたらさすっごい懐かしいの見つけた｡

(麻美) 何？

(美穂) 見て これ｡

ジャ～ン｡

(夏希) う～わ 超懐かしい｡

(麻美) え～ 何これ いつ頃？

(美穂) これ ラウンドワン出来て すぐだから 中２とか？

(夏希) 行ったね｡

(美穂) ね｡

(麻美) 何だっけ？ このポーズ｡

(美穂) これでしょ？

何か 専門学校のポスターの真似｡

(麻美) あ～ 何だっけ あれ あれ｡

熊谷ビューティー学院！

(夏希) あ～ そうだ 懐かしい｡

この時 やたら これやってたよね｡

(麻美:美穂) やってた｡

(麻美) 何が面白かったんだろ｡

(夏希) 結局 誰もここ行ってないしね｡

(麻美) 確かに｡

(美穂) いや みさごん行ってたよ｡

(麻美) そうなんだ｡

(美穂) みさごんね 確か熊谷ビューティー学院だよ｡

(麻美) 知らなかった｡

(夏希) ってか ｢みさごん｣って 久しぶりに聞いたんだけど｡

(麻美)｢ごんみさ｣ね｡

(夏希) 途中から｢ごんみさ｣になってたね｡

(麻美) 後半 ｢ごんちゃん｣だったよ｡

(美穂) 一部では ｢ちゃんごん｣だったよ｡

(夏希) もう原形ないし｡

(美穂) そういえばさ真里ちゃん 覚えてる？

(麻美) 真里ちゃんって宇野真里ちゃん？

(美穂) そう 生徒会長の｡

今 何やってるか知ってる？

(夏希) えっ 知らない｡

(美穂) パイロット｡

(夏希) え～ すごっ！

(美穂) すごくない？

(麻美) ついに物理的にも 雲の上の存在になっちゃったね｡

(美穂) 真里ちゃんのさ 何がすごいってさ勉強できて スポーツできて 顔かわいいのに全然 鼻につかないとこ…｡

(夏希) あ～ 分かる いい子なんだよね｡

(麻美) でもさ あそこまで優秀でさ 性格までいいってさむしろ 性格悪いよね｡

(美穂) どういうこと？

(麻美) だってほら うちらに妬むことすら させてくれないんだよ｡

(夏希) 確かに｡

褒めるしかできないもんね｡

(麻美) そうなのよ｡

(美穂) いいじゃん 褒めたら｡

(夏希) あの子 絶対 人生２周目だよね｡

(麻美) あったね 宇野真里タイムリープ説ね｡

(夏希) じゃなきゃ あそこまで優秀になれないよ｡

(美穂) でもさ 真里ちゃん ちょっと完璧過ぎて近寄りがたさあったよね｡

(夏希) 分かる｡

いい子なんだけど緊張しちゃう｡

(美穂) そうなんだよね｡

(麻美) 何かさ… 超ダメになってる同級生 とかいないのかな？

(美穂) 何で？

(麻美) このままだと劣等感に押しつぶされそうだから ダメな人の話聞いて元気もらいたい｡

(美穂) 最低だな｡

(夏希) でも ちょっと分かる ないの？ ダメな同級生の話｡

(美穂) ないでしょ みんな頑張ってんだから｡

(麻美) 何だよ～ 頑張るなよ～｡

(夏希) 養分くれよ｡

(美穂) あんたらが一番ダメだよ｡

(夏希) そろそろ行く？

(麻美) そうだね｡

(美穂) 帰りにプリクラ撮ってかない？

(夏希) あっ いいね｡

(麻美) 撮ろう 撮ろう｡

(夏希) ラウンドワン 開いてるかな？

(麻美) あそこ 朝までやってるでしょ｡

(夏希) そっか じゃあ 行こう｡

(麻美) え～ 何 今 こんなになってんの？

(美穂) めっちゃ進化してんじゃん｡

(夏希) 一個一個がデカいよね｡

(美穂) うん｡

これさ これぐらいキレイに 撮れますよってこと？

(麻美) そうだよ ｢お前らみたいな顔でも こんぐらいキレイに写るぞ｣…ってことだよ｡

(夏希:美穂) マジか｡

(美穂) これ やろうよ 熊谷｡

(夏希) あっ そうだ 熊谷｡

(麻美) あっちだよ あっちだよ｡

(美穂) あ～い｡

(シャッター音)

(麻美) 体が もう忘れてる｡

(美穂) いい感じ いい感じじゃん｡

持って帰ってよ｡

(麻美) 持って帰るよ｡

(夏希) この後 どうする？

(麻美) あっ まだ こんな時間なんだ｡

(美穂) え～ あした 休みだしなぁ｡

(麻美) カラオケとか行っちゃう？

(夏希) あっ いいね カラオケ｡

(美穂) 行くか｡

(夏希) 行こうよ｡

(麻美) プリクラ撮ってカラオケ｡

(美穂) 久しぶり｡

(福田) いらっしゃいませ 何名様ですか？

(麻美) ３人です｡

福ちゃん？ 福ちゃんじゃない？

(福田) お～ お～ お～！

誰かと思った～｡

(美穂) めっちゃ久しぶり｡

久しぶり えっ ３人 いつ以来だっけ？

(夏希) いつだろう？ 成人式が最後じゃない？

>> ああ｡

(麻美) だから 13年ぶりか｡

お～ そんな経つかぁ｡

今日は 何の集まりなの？

(夏希) 何の集まりっていうかいつもの集まりだよね｡

(美穂) ﾓﾝﾀｰﾆｬでごはん食べてきた｡

そうなんだ｡

あ～ 時間どうする？

(美穂) どうしよっか｡

(夏希) え～ 取りあえず ２？

(美穂) ２だね ２時間で｡

２時間ね 今 すいてるから 広い部屋にしとくね～｡

(麻美) ありがとう｡

(夏希) わっ 広っ！

(美穂) ホントだ｡

そういえばさ 成人式の後も ここ来なかったっけ？

(麻美) 来た 何なら 部屋もここだった｡

(美穂) あ そうだ でさ 福ちゃんがさ何だっけ “粉雪”か何か歌ってさみんな ｢めっちゃ うま！｣って なったよね｡

(麻美) 歌ってたね｡

“粉雪”だったけ？

(美穂) 違ったっけ？

“粉雪”系の そっち系だった思う｡

(麻美) 何か そっち系だった｡

(夏希) 誰から歌う？

(麻美) 早くね？

(夏希) えっ 早い？

(麻美) 着いてすぐ歌うって高校生じゃん｡

(夏希) 高校生ってそうなの？

(麻美) 何か そういうイメージない？

(ノック)

お待たせしました～｡

(３人) ありがとう｡

(福田) これ サービス｡

(３人) わぁ～！

(夏希) いいの？ 怒られない？ >> 大丈夫｡

(美穂) ありがとう｡ >> いいえ ごゆっくり～｡

(ドアが閉まる音)

(麻美) 食べてね｡

(夏希:美穂) うん｡

(美穂) あーちんもね｡

(麻美) 食べる 食べる｡

(美穂) そういえばさ 福ちゃんって まだ音楽やってんだっけ？

(麻美) 分かんない やってんじゃない？

(夏希) いや やめたんだよ｡

(麻美) そうなんだ｡

(夏希) あれ？ ２人 どこまで知ってる？

(麻美) 私は成人式の時に 音楽やる っていうのを聞いたっきり｡

(美穂) 私も｡

(夏希) そっか｡

あの後 事務所には入れたんだけどそっから なかなか売れなくてさ｡

(麻美) 厳しい世界だもんね｡

(夏希) うん｡

(麻美) 食べてね｡

(夏希:美穂) うん｡

(美穂) あーちんは？

(麻美) 食べる 食べる｡

(夏希) んっ あ そう｡

そんで その後 事務所 辞めてフリーで頑張ってた らしいんだけど全然でさ｡

(美穂) 噂 聞かないってことは そういうことだよね｡

(麻美) 覚えてない？ 何かさ 福ちゃんはさ ここで音楽やるって言った時 みんな 何か｢絶対売れるよ｣とか 言ってなかった？

(夏希) 言ったかも｡

(美穂) うん｡

(麻美) なっち サインもらってなかったっけ？

(夏希) もらった！

(美穂) ヤバっ｡

(夏希) いやぁ うちらにも多少 責任あるよね｡

(麻美) そうだね あの時 止めときゃよかったね｡

(夏希) 今思えばね｡

(美穂) いや でもさあの“粉雪”聴いたら いけると思わない？

(麻美) うまかったよね｡

(美穂) そうそう…｡

(麻美) え～ “粉雪”だったっけ？

(美穂) いや～ 何か“粉雪”系の そっち系だよ｡

(夏希) もう“粉雪”でいいじゃん｡

(美穂) 食べてよ｡

(夏希:麻美) うん｡

(夏希) あーちんも食べてね｡

(麻美) うん｡

(麻美) もう言っちゃうけどさ｡

(夏希) ん？ 何？

(麻美) 入んないよね｡

(美穂) ごはん食べてきちゃったからね｡

(夏希) 気持ちは 超ありがたいんだけど 全然入んない｡

(麻美) 気持ちは 超ありがたいのよ｡

でも入んないのも事実だよね｡

(夏希) 揺るがざる事実だね｡

(美穂) しかも これ サービスのポテトだから残しづらいんだよな～｡

(夏希) 残しづらい｡

(麻美) あのさ こんなん 絶対言っちゃいけないんだけど言っていい？

(夏希) どうぞ｡

(麻美) サービスしてくれるんだったら ポテトじゃなくてドリンクを タダにしてほしかったよね｡

(夏希) 絶対言っちゃいけないけど そうなのよ｡

(美穂) ちなみにだけど うちらが ごはん食べてきたってことは一応 伝えたからね｡

(麻美) みーぽん言ってたね｡

(美穂) あくまでも ｢ちなみに｣だよ｡

(麻美)｢ちなみに｣のやつだよね｡

(夏希) これってさ 誰も悪くないじゃん｡

(麻美) 誰も悪くない｡

(美穂) 加害者のいない事件だね｡

(夏希) でもさ 誰が悪いか決めろ って言われたら福ちゃんだよね？

(美穂) 福ちゃんなんだよね 僅差だけど｡

(夏希) そう 超僅差｡

(美穂) 鼻差で福ちゃん｡

(麻美) 福ちゃんってさ あれじゃない？

しーちゃんと 結婚したんじゃなかったっけ？

(美穂) 結婚した｡

(麻美) そうだよね｡

(夏希) 何かね ４年ぐらい前に 別れちゃったみたい｡

(麻美) えっ！

そうなんだ｡

(夏希) 私 ちょっと前にしーちゃんに会ったんだよ｡

(麻美) へぇ～ 知らなかったわ｡

何で別れちゃったの？

(夏希) あぁ… 何かねしーちゃんのほうが支えきれなく なっちゃったみたい｡

(美穂) えっ でもさ 福ちゃんが 音楽やるって言った時さしーちゃんが 一番 背中押してなかったっけ？

(麻美) 押してた｡

(美穂) 押してたよね｡

(麻美) 何なら あの２人はそれで いい感じになって 付き合ったんじゃなかったっけ？

(夏希) しーちゃんも30前にして いろいろ考えちゃったんじゃない｡

で 今は 職場の人と付き合っててもうすぐ結婚するんだって｡

(美穂) ふ～ん｡

福ちゃんは？

(夏希) 福ちゃんはねバイト先の子と付き合い始めてできちゃった結婚したみたい｡

(美穂:麻美) え～！

(美穂) 福ちゃん パパなの？

(夏希) で それが きっかけで音楽も きっぱりやめて 今はバイト掛け持ちしながら家族 養ってんだって｡

(麻美) あぁ～｡

何か知らない間に いろいろあったんだね｡

(夏希) でも 偉いよね｡

(美穂) うん｡

偉いよ やめるのも勇気いるもん｡

(夏希) うん｡

(麻美) いやぁ そんな人のサービスポテト 絶対残せないじゃん｡

(夏希) 確かに｡

(麻美) もう ここは なっちが責任持って 食べるべきなんじゃ…｡

(夏希) 何でよ ２人もチヤホヤしてたじゃん｡

(麻美) したけど サインまではもらってないもん｡

(夏希) 私も もらったけど すぐ なくしたもん｡

(美穂) うわ～！

(麻美) えっ なくしたの？

ひっど！ なおさら食べろよ！

(美穂) ていうかね 私 そんなチヤホヤしてないよ｡

(夏希) してたでしょ｡

(美穂) うまいなとは思ったけどさすがに厳しいだろうなと 思ってたもん｡

(夏希) ホントに？

(麻美) 止めなかったっていうことで ３人同罪だよ｡

(美穂) え～！

(麻美)｢え～｣じゃない ３人で食べよう｡

(美穂) 鼻差で福ちゃん 悪いのに？

(麻美) それ もう言わないの｡

(夏希) よし じゃあ 取りあえず歌ってカロリー消費しますか｡

(麻美) そうだね 歌おう 歌おう｡

(美穂)♪～ 僕たちは燃え盛る 旅の途中で出会い

(麻美) ⟨こうして私たちは 前半の何曲かは最近の曲を歌い…⟩

♪～ ENJOY 音楽は鳴り続ける

♪～ IT’S JOIN 届けたい 胸の鼓動

♪～ ココロオドル アンコール わかす Dance Dance Dance

(３人)♪～

(READY GO！)

(麻美) ⟨後半は 懐かしい曲合戦になった⟩

(３人)♪～ 大きな希望 忘れない

♪～ 10年後の８月 また出会えるのを信じて

♪～ ポケベルが鳴らなくて

♪～ 恋が待ちぼうけしてる

(麻美) ポケベルって だいぶ上の世代だよね？

(夏希) いとこが よく歌ってたんだよね｡

(美穂) うちらが保育園ぐらいの時じゃ なかった？

(麻美) 通話はできないんだっけ？

(美穂) 何か 番号 送るんじゃなかった？

(麻美) 番号？

(美穂) うん で 送られてきた番号に公衆電話から かけるんじゃなかった？

(夏希) 何かさ 文字送れるやつなかった？

(麻美) 文字？

(夏希) ほら カタカナとか送れるやつ あれってピッチだっけ？

(麻美) ピッチじゃない？

(美穂) あっ 文字送れるやつもあるね｡

(夏希) だよね｡

(美穂) 何か すごいよ｡

例えば ｢ナツキ｣って送りたかったら最初に｢＊２＊２｣を押します｡

(麻美)｢＊２＊２｣聞いたことある｡

(美穂) で ｢５･１｣で｢ナ｣｡

(麻美) ５･１？

(美穂) アカサタナの５ で ナ行の１個目だから ５･１｡

(麻美) めんどくさっ！

(美穂) ゾッとするね｡

(麻美) そりゃ ポケベル鳴らないわ｡

(夏希) 確かに めんどくさいからだ｡

(麻美) ⟨ちなみに たくさん歌ったら ちゃんとお腹がすいて結局 サービスのポテトだけじゃ 足りなくなり追加でポテトを注文して 平らげた⟩

(３人)♪～ その笑顔 その涙

♪～ ずっと守ってくと決めた 恋におちて

♪～ I love you

(美穂) …って これ 何の主題歌だっけ？

(麻美) あれだよ あのさ… 草彅君のドラマ｡

(夏希)“恋におちたら”｡

(麻美) そうだ まんま 曲のﾀｲﾄﾙだった｡

(夏希) じゃ クイズね｡

(麻美) うん 何？

(夏希) これは何の主題歌でしょう？

(美穂:麻美) はい｡

(夏希 おぼろげな鼻歌)

(麻美) 分かったけどさ…｡

(夏希) おっ 何？

(麻美)“家政婦のミタ”でしょ？

(夏希) 正解！

(麻美)｢正解！｣じゃなくてさ どうせ出すならせめて歌えるのをクイズにしなよ｡

(美穂) よくその情報量で クイズに踏み切ったよね｡

(麻美) ねぇ 中学の時さ 三田って先生 いなかった？

(美穂) あ～ ミタコングね｡

(夏希) 私 大嫌いだった｡

(美穂) ミタコング めっちゃ怖かったもん｡

(夏希) ねぇ｡

あの人すぐデッカい声出すじゃん｡

(麻美) 私 あいつにさアドバンス 没収されたからね｡

(美穂) ゲームボーイアドバンス？

(麻美) うん…｡

(夏希) それは授業中やってたからでしょ｡

(麻美) 違うよ 放課後 ぺーたん家で 一緒にやろうっつって持ってただけだよ｡

(夏希) ぺーたん 超懐かしいんだけど｡

(美穂) でも あーちん 授業中もやってたよね？

(麻美) やってた｡

(夏希) やってたんじゃん｡

(麻美) でも 現行犯じゃないからね｡

(美穂) そもそも 学校に持ってきちゃダメだから｡

(麻美) まあね｡

(夏希) てかさ ミタコング 今だったら 絶対 問題になるよね｡

(美穂) あ～｡

(麻美) なるね～｡

でも多少は まるくなってんじゃないの？

(美穂) いや 辞めたじゃん｡

(麻美) えっ マジで？

(美穂) 知らない？

(麻美) 知らない｡

(美穂) だいぶ前だよ 問題起こしたとか｡

(麻美) あ～ やっぱり そうなんだ｡

(夏希) なるべくしてなったって感じだね｡

(麻美) 何だよ 辞める前にアドバンス返せよ～！

(美穂) えっ 返してもらってないんだ｡

(麻美) まだ返してもらってないよ｡

しかも買ったばっかの“逆転裁判” ささったまんまだったからね｡

(美穂) ってか よく覚えてんね｡

(麻美) 覚えてるよ～｡

あの絶望感は10年経った今も 鮮明に覚えてますよ｡

(夏希) ん？ 10年？

(美穂) あれ もう20年近く前だよ｡

(麻美) え… そんな経つ？

(美穂) はい｡

(麻美) 怖っ！

(夏希) 何かさ 30過ぎてから 時間経つの早過ぎじゃない？

(麻美) 早い！

(美穂) それってさ 本で読んだんだけど１年の相対的な長さが 短くなるからなんだって｡

(夏希) ふ～ん｡

(麻美) へぇ～｡

ごめん ｢へぇ～｣って言ったけど どういうこと？

(美穂) 例えばさ ３歳にとっての１年って 人生の３分の１じゃん｡

でも 30歳にとっての１年って人生の 30分の１でしかないじゃん｡

そうやって １年の相対的な長さが どんどん短くなるにつれて早く感じるようになるんだって｡

(麻美) 確かに そのくらい早いよね｡

(夏希) てか 最近 １日過ぎるのも 早くない？

(麻美) 早いよ～｡

(夏希) 今日 仕事してたのだって もう 昨日のことのように感じるもん｡

(美穂) だね…｡

(麻美) うん｡

まぁ 今12時過ぎてるから 実際 昨日なんだけどね｡

(美穂) そうなのよ 昨日なのよ｡

(夏希) いや そこは もういいじゃん｡

私も言った後 ｢あっ｣て思ったけどさ｡

(麻美) ごめん スルーできなかったわ｡

あ～ コンビニ寄っていい？

(夏希) 私も行きたい｡

(美穂) はい～｡

(麻美) さっきの時間の話だけどさ｡

(夏希:美穂) うん｡

(麻美) あれってさ うちらの生活に 新鮮味がなくなってきてる…っていうのもあるよね｡

(美穂) 確かに｡

基本 同じことの 繰り返しだもんね｡

(麻美) うちら 10年後も 変わってなさそうだし｡

(夏希) 変わんなそう 現に10年前と変わってないし｡

(美穂) ３人とも独身だしね｡

(麻美) これ このまま行く可能性あるね｡

(夏希) いいじゃん このままで そんでさおばあちゃんになったら 一緒に住もうよ｡

(麻美) え？ ３人だけで？

(夏希) うん 楽しそうじゃない？

(美穂) 楽しそうだけどさ 誰か 寝たきりとかになったら大変だよ｡

(夏希) 面倒見たらいいじゃん｡

(美穂) 面倒見るって３人 うちら同い年だからね？

(夏希) あっ そっか｡

(麻美) しかもさ １人ならまだしも ２人ダメになったらヤッバいよ｡

(夏希) やぁ～ ヤバい｡

それはゾッとするね｡

(麻美) 私 絶対ヤダ～｡

(美穂) じゃあさ ３人で同じ老人ホームに 入ればよくない？

(麻美) それ いいね｡

(美穂) そしたらさ うちら入る時 40年後とかじゃん その頃にはさ もう超ハイテク老人ホームみたいに なってそうじゃない？

(麻美) 車いすが浮いちゃってんでしょ？

(美穂) あれでしょ フリーザ乗ってるやつでしょ？

こういうやつ…｡

(夏希) よし 決まりだね｡

(麻美) 決まりなの？

(夏希) うん 決まりでしょ｡

(美穂) 行く？

(麻美) 私 歩いて帰るわ｡

(美穂) ホント？

(麻美) 今日 たくさん食べたし歩く｡

(夏希) この距離じゃ消費しないでしょ｡

(美穂) ポテト１本も無理だよ｡

ありがとね あーちん プレゼント｡

(麻美) おめでとう！

じゃあね おめでとう！

じゃあね～｡

♪～

(車の急ブレーキ音)

(麻美) ⟨ん？ え？⟩

⟨死んだ…？⟩

⟨ウソでしょ…⟩

⟨こんなあっけないの？⟩

⟨えぇ～～～⟩

⟨で どうすればいいんだろ？⟩

⟨ん？ ん？ ん？ ん？⟩

⟨いや ずっと このままじゃないよね？⟩

⟨え？ こういう地獄なのかな？⟩

♪～

(麻美) あの… すいません｡

(受付係) はい｡

(麻美) 何か死んじゃったみたい なんですけどどうしたらいいですか？ >> はい ではですねこちらに お名前と生年月日を ご記入ください｡

(麻美) はい｡

はい ありがとうございます｡

少々お待ちください｡

え～｡

え～ あっ これか｡

近藤麻美様ですね？

(麻美) はい｡

>> はい 33年間お疲れさまでした｡

(麻美) どうも｡

では これから 新しい生命に ご案内いたしますね｡

(麻美) あの もう今からってことですか？ >> はい｡

(麻美) 何か こう インターバル みたいなのはないんですね？

>> インターバルはないですね｡

(麻美) そうなんですか｡

>> よろしいですか？

(麻美) はい 分かりました｡

ではですね こちら左側 真っすぐ進んでいただきますと扉がございますので そちらから 来世にお入りください｡

(麻美) はい｡ >> はい｡

いってらっしゃいませ｡

(麻美) ありがとうございます｡

あっ｡

すいません ちなみになんですけど次 どこに生まれ変わるとかって 分かったりしますか？

次？ あっ 分かりますよ｡

次はですね 近藤様は… あっ これだ｡

近藤様は グアテマラ南東部の オオアリクイですね｡

(麻美) すいません 何ですか？ >> え～ グアテマラ南東部のオオアリクイですね｡

こちらですね｡

(麻美) オオアリクイ？ >> はい｡

(麻美) 人間じゃないっていう ことですか？ >> そうですね｡

(麻美) 何で私 オオアリクイなんですかね？

一応 近藤様の 生前の内容に基づいてオオアリクイということだと 思いますけど｡

(麻美) 私の その 行いが 良くなかったってことですか？

そうですね まぁ ご希望の生命で ないのだとしたらその 必要な徳が不足してる 可能性は高い…｡

(麻美) 徳が不足？ >> はい｡

(麻美) 徳が不足か… あれ～？

え～ それは何とかならないんですか？

そうですね こればっかりは 一応 決まりなので｡

申し訳ございません｡

(市民) 〔だから 何とかならないの？〕

(麻美)〔規則なのでね 支払っていただくしか〕

(麻美) ⟨この人に言っても どうしようもないんだろうな⟩

じゃあ… 分かりました もう あそこから私は オオアリクイの人生 ということですよね？

そうですね まぁ あとは あの～ 来世ではなくて今世をやり直すか ですよね｡

(麻美) ん？ どういうことですか？

新しい生命ではなくて もう一度 近藤麻美様として同じ人生をやり直すことでしたら 可能ですね｡

(麻美) それもあり!? >> ええ まぁ そこでご自身の人生を 修正していただいてご希望の生命に生まれ変わる 確率を上げることはできます｡

(麻美) ん？ 要するに その徳をたくさん積んでいく っていうことですよね？

>> そうですね｡

(麻美) はあ はあ はあ｡

うん… じゃあ そっちのほうが いいですね｡ >> そうされますか｡

じゃ やり直すということで｡

(麻美) はい はい｡

かしこまりました ではこちら右側 真っすぐ進んでいただきますと扉がございますので そちらから 今世にお入りください｡

(麻美) ありがとうございます｡ >> いってらっしゃいませ｡

♪～

(麻美 産声)

(久美子) 麻美ちゃん ちょんちょん｡

麻美ちゃん かわいいね｡

(麻美) ⟨こうして 私の人生２周目が スタートした⟩

(久美子) 生まれてきてくれて ありがとね～｡

(寛) ありがとね～｡

(久美子) 気持ちいいね～｡

(麻美) ⟨来世も 人間に生まれ変わるため２周目では とにかく 徳を積まなければならない⟩

⟨とはいえ それができるのは だいぶ先の話で今の私にできることは 育つことのみ⟩

⟨それにしても 記憶を持ったまま 過ごす乳児期は退屈だった⟩

⟨ひたすら寝かされ あやされるだけの毎日⟩

⟨娯楽といえば リビングから聞こえてくるテレビの音くらい⟩

⟨正直 言葉は すぐにでも喋れたのだけどさすがに このタイミングで 喋ると引かれるので最初の数か月はおとなしくした⟩

⟨そして 生後５か月で ミルクから離乳食になり…⟩

⟨うまっ 久しぶりのお米の味⟩

⟨生後10か月くらいから 会話や歩行を解禁し徐々に実力を見せ始めた⟩

⟨そして 保育園に入園⟩

⟨１周目の知識と経験を 小出しにして大人たちを驚かせた⟩

(洋子) えっ！ 麻美ちゃん これ自分で書いたの？

(麻美) うん 先生の名前も書けるよ｡ >> ホントに？

書いてごらん 書いてごらん｡

すごいね～ 何か 大人っぽい字書くね｡

(麻美) うん｡ ⟨大人だからね⟩

(園児たちが遊ぶ声)

(麻美) ⟨33年ぶりの セーラームーンごっこ⟩

⟨といっても…⟩

(玲奈) 私 マーキュリー！

(早苗) 私もマーキュリー！

(真央) 真央もマーキュリーがいい｡

(麻美) ⟨ほぼ マーキュリーごっこ⟩

>> 麻美ちゃんは？

(麻美) じゃ 私 悪者やる｡

>> 悪者？

(麻美) うん 私は怪獣… ミタコング｡

>> ミタコングって何？

(麻美) ミタコングはひとの物を取る怪獣なの｡

わわわ…！ >> キャ～！

(麻美) ⟨結果 ほぼ鬼ごっこ⟩

(麻美) ⟨１周目で よく吸っていたツツジの蜜は窃盗 もしくは器物損壊で 徳に影響しそうなので一応 控えた⟩

⟨そんなある日 私はあることに気付いた⟩

(洋子) おかえりなさい！

玲奈ちゃん パパ来たよ｡

(玲奈) は～い！

(洋子) 今日も元気にしてましたよ｡

(玲奈の父) ありがとうございます｡

(麻美) ⟨玲奈ちゃんのパパと洋子先生が 最近 やけに親しげだということ⟩

⟨１周目では 気付かなかったけど大人の目線で見ると 明らかにお互い意識している⟩

⟨思い出した そういえば １周目の今頃玲奈ちゃんの名字が突然変わり どこかへ引っ越した⟩

⟨しかも 同じタイミングで 先生もいなくなった⟩

⟨つまり この後 ２人は不倫関係になりそれがバレて 玲奈ちゃんの両親は離婚⟩

⟨玲奈ちゃんは ママと一緒に引っ越して洋子先生は保育園をクビになる⟩

⟨うわ 最悪じゃん⟩

⟨マジで あのオヤジ何なの⟩

⟨キモっ！⟩

(洋子) お仕事は 帰りとか遅いんですか？

(麻美) ⟨どうやら まだ 親密な距離感ではないがこのまま放っておくと 間違いなく不倫に発展する⟩

(洋子) そうなんですか へぇ～！

(麻美) 先生！

今日ね 玲奈ちゃんたちと セーラームーンごっこやったよ｡

>> え～ 楽しそう！

(麻美) うん 楽しかったよ！

>> じゃ 今度は先生も一緒に 遊ぼうかな～｡

(麻美) いいよ！

>> やった～ 先生は何やろうかな？ >> 玲奈 そろそろ帰ろうか｡

じゃ また あした｡

(玲奈の父) あっ はい また｡

じゃあね またね あしたね バイバ～イ！ >> バイバ～イ！

(玲奈の父) 洋子先生 また｡

(洋子) 気を付けてね！

(麻美) ⟨私は翌日も その次の日も玲奈パパと洋子先生が ２人きりになる時間をつくらせないようにした⟩

⟨しかし その作戦もむなしく…⟩

(玲奈の父) これ｡

(洋子) あっ｡

後で｡ >> はい｡

(麻美) ⟨あれが携帯番号なら かなりマズい⟩

♪～

(麻美) ⟨あ～ やっぱり番号だ⟩

⟨ただ これを捨てたところで洋子先生が玲奈パパに なくしたと言えばまた渡されちゃうだろうし…⟩

(麻美) ⟨取りあえず 洋子先生側は これでＯＫ⟩

♪～

(麻美) ⟨問題は玲奈パパ側⟩

⟨何日経っても 連絡が来なかったらきっと何かしら アクションを起こすでしょ？⟩

⟨そうなると 洋子先生は番号が書いていなかった ってことを伝えて玲奈パパは改めて番号を渡す⟩

⟨ということは 玲奈パパがアクションを起こさないように 持っていかなければならない⟩

⟨ただ そんな方法は思い付かない⟩

⟨あ？⟩

⟨ちょっと待て⟩

⟨今って まだケータイもピッチも 普及してないよね？⟩

⟨020って何？⟩

〔ポケベルって だいぶ上の世代だよね？〕

(美穂)〔うちらが保育園ぐらいの時じゃ なかった？〕

(麻美) ⟨ポケベルだ⟩

⟨だとしたら 使えるかも⟩

(美穂)〔例えば ｢ナツキ｣って送りたかったら最初に｢＊２＊２｣を押します〕

〔｢５･１｣で｢ナ｣〕

(久美子) 麻美 もうそろそろ寝なさい｡

(麻美) は～い｡

(麻美) ⟨よし⟩

(麻美) ⟨あ… ポケベルって 番号通知 出んのかな？⟩

>> あれ？ 麻美？

(麻美) ⟨おぉ…⟩

どうした？ おしっこ？

(麻美) うん でも もう済んだ｡ >> じゃ 寝なさい｡

(麻美) うん｡

(麻美) ⟨番号通知が 出る可能性がある以上家からは かけられないよなぁ⟩

(寛) あぁ…｡

(麻美) ⟨公衆電話に行くしかない⟩

(麻美) ⟨うっ…⟩

♪～

(麻美) ⟨公衆電話って どこにあんだろ？⟩

⟨使ったことないから 分かんないなぁ⟩

⟨公衆電話？ 公衆電話～ 公衆電話…⟩

〔あれ？ 公園の電話ボックス なくなってる〕

(麻美)〔ん？ あんなとこに 電話ﾎﾞｯｸｽなんてあったっけ？〕

〔あったよ～〕

(麻美) ⟨ナイス 遥！ まだ生まれてないけど⟩

♪～

(麻美) ⟨あった！⟩

♪～

(麻美) ⟨あぁ…⟩

♪～

(麻美) ⟨ちょっと失礼しま～す⟩

♪～

(麻美) ⟨あっ お金いるんだ～⟩

⟨うわぁ～⟩

⟨も～う…⟩

⟨あぁ めんどくさ～い⟩

⟨小っちゃいから 段が高いんだよなぁ⟩

(麻美) ⟨帰って来たのはいいけどお金がどこにあんのか 分かんない お金…⟩

⟨お金って どこにあるんだ？⟩

⟨あ！⟩

〔お父さん へそくりしてんの？〕

〔靴の中に コツコツ貯めてるらしいよ〕

(麻美) ⟨ナイス 遥！ まだ生まれてないけど⟩

♪～

(小銭の音)

(麻美) ⟨これ 徳下がるかな？⟩

⟨でも 玲奈ちゃんのためだから 差し引いてもプラス… だよね？⟩

♪～

(麻美) ⟨歩幅が狭いから進むのが遅い⟩

♪～

(麻美) ⟨再び失礼します⟩

♪～

☏(呼び出し音)

☏(音声ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ) こちらは 東京テレメッセージです｡

☏ メッセージを入力して ♯を２回 押してください｡

☏(音声ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ) ありがとうございます｡

(麻美) ⟨よし 帰ろう⟩

⟨よいしょ⟩

(警官) お嬢ちゃん！

お嬢ちゃん どうしたの こんな時間に｡

(麻美) ⟨ヤッバ…⟩

(警官) お嬢ちゃん ちょちょ… お嬢ちゃん 待って｡

お嬢ちゃん お嬢ちゃん？

(麻美) ⟨あ～ 怖かった～⟩

(車の走行音)

(麻美) ⟨まさか この年で 警察に追われる身になるとは⟩

⟨これ あした 筋肉痛だな⟩

⟨ん？ 子供って筋肉痛になんのか？⟩

⟨眠い… この体で この時間はキツい⟩

(麻美) ⟨まぁ できる限りのことは やった…⟩

♪～ “ﾎﾟｹﾍﾞﾙが鳴らなくて”

(麻美) ⟨翌日⟩

♪～

(ｶｰｽﾃﾚｵ)♪～ “ﾎﾟｹﾍﾞﾙが鳴らなくて”

(玲奈の父) こんばんは｡

(洋子) おかえりなさ～い｡

玲奈 帰るよ｡

(玲奈) え～ もう帰るの～？

ほら 早く帰らないと ママが心配するから｡

(玲奈) は～い！

(玲奈の父) はい｡

忘れ物ないようにね｡

(玲奈) は～い｡

はい じゃあね バイバ～イ！

タッチ バイバイ｡ >> はい 行こう｡ バイバ～イ｡

♪～ “ﾎﾟｹﾍﾞﾙが鳴らなくて”

(麻美) ⟨どうやら 作戦は成功したようでこの後も ２人の距離は これ以上 縮まることはなく…⟩

♪～

パパ 早く行こう｡ ああ 行こうか｡

(麻美) ⟨玲奈ちゃんと洋子先生も いなくならずに済んだ⟩

⟨ついでに 大量の徳も積むことができたはず…⟩

(久美子) うわ 何 あの舌～｡

(寛) すっごいな｡

(久美子) 主食がアリって嫌ね｡

でも アリって小さいけど 主食になるのかな？

(麻美) ⟨引き続き 精進しようと 心に誓った⟩